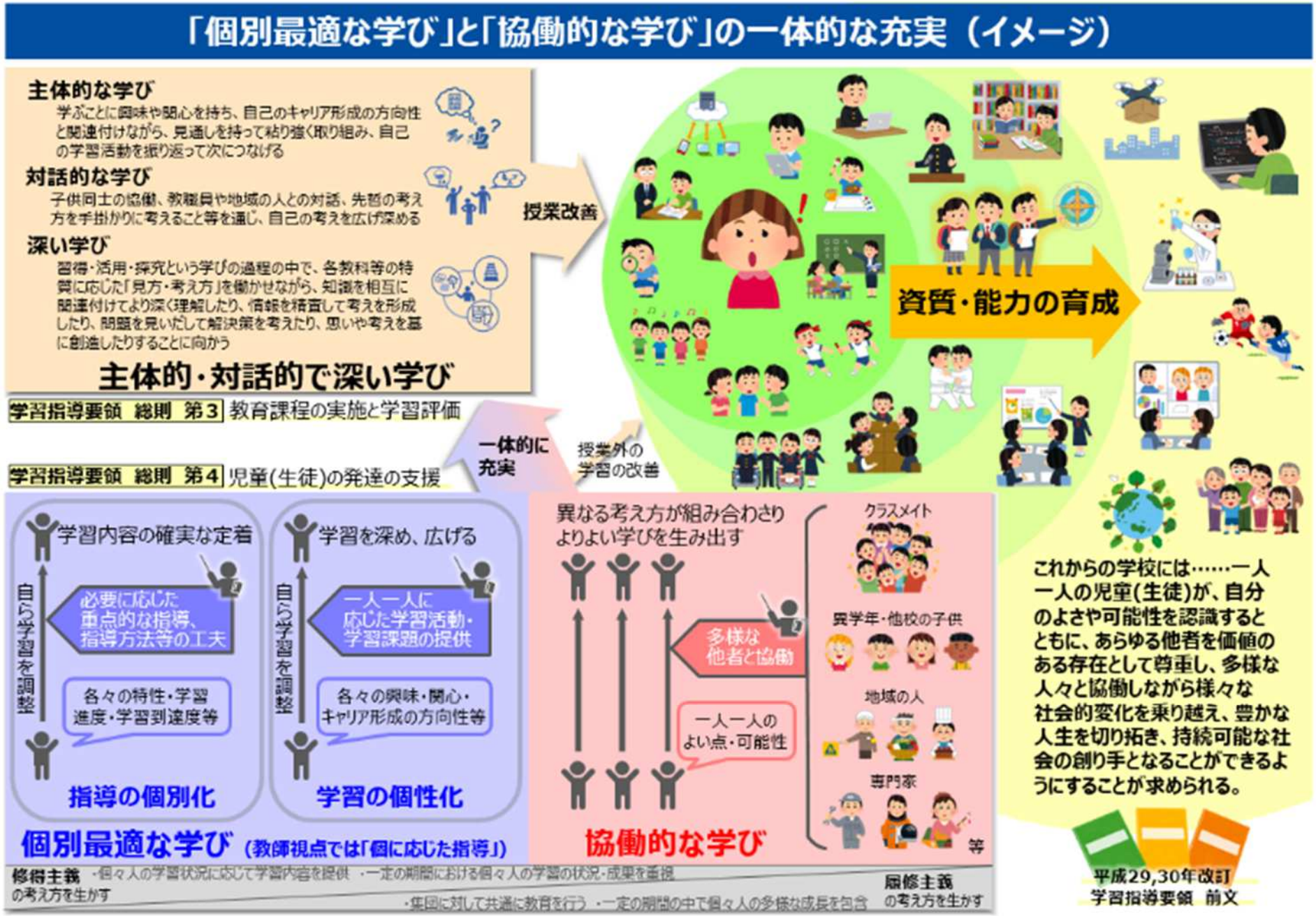
「個別最適な学び」とは

戸田市教育委員会
教　育　政　策　室

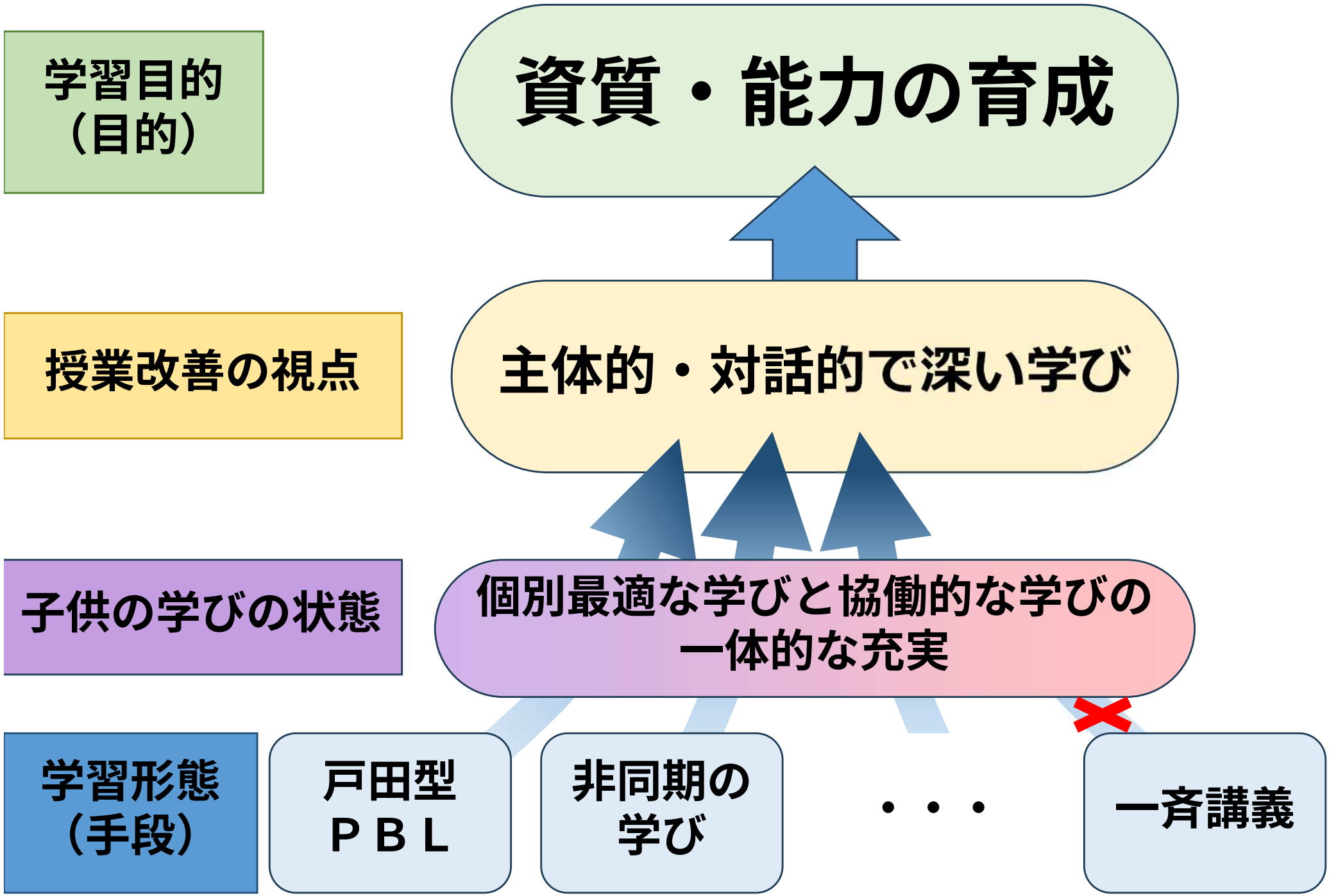
1　「個別最適な学び」とは

文部科学省資料：**「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実（イメージ）**を引用



※本資料は、「教育課程部会における審議のまとめ」（令和３年１月25日中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会）に基づき、概念を簡略化し図等として整理したものである。

1　「個別最適な学び」とは


学習目的
（目的）
資質・能力の育成
授業改善の視点
主体的・対話的で深い学び
子供の学びの状態
個別最適な学びと協働的な学びの
一体的な充実
学習形態
（手段）
戸田型
ＰＢＬ
非同期の
学び
・・・
一斉講義

１　「個別最適な学び」とは

令和３年１月２６日　中央教育審議会　「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～」（答申）総論解説資料　より抜粋

個別最適な学び【学習者視点】（＝個に応じた指導【教師視点】）

＼子供が自己調整しながら学習を進めていく／



指導の個別化

- ✓ 子供一人一人の特性・学習進度・学習到達度等に応じ、
- ✓ 教師は必要に応じた重点的な指導や指導方法・教材等の工夫を行う

→ **一定の目標を全ての子供が達成することを目指し、異なる方法等で学習を進める**



学習の個性化

- ✓ 子供一人一人の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、
- ✓ 教師は一人一人に応じた学習活動や課題に取り組む機会の提供を行う

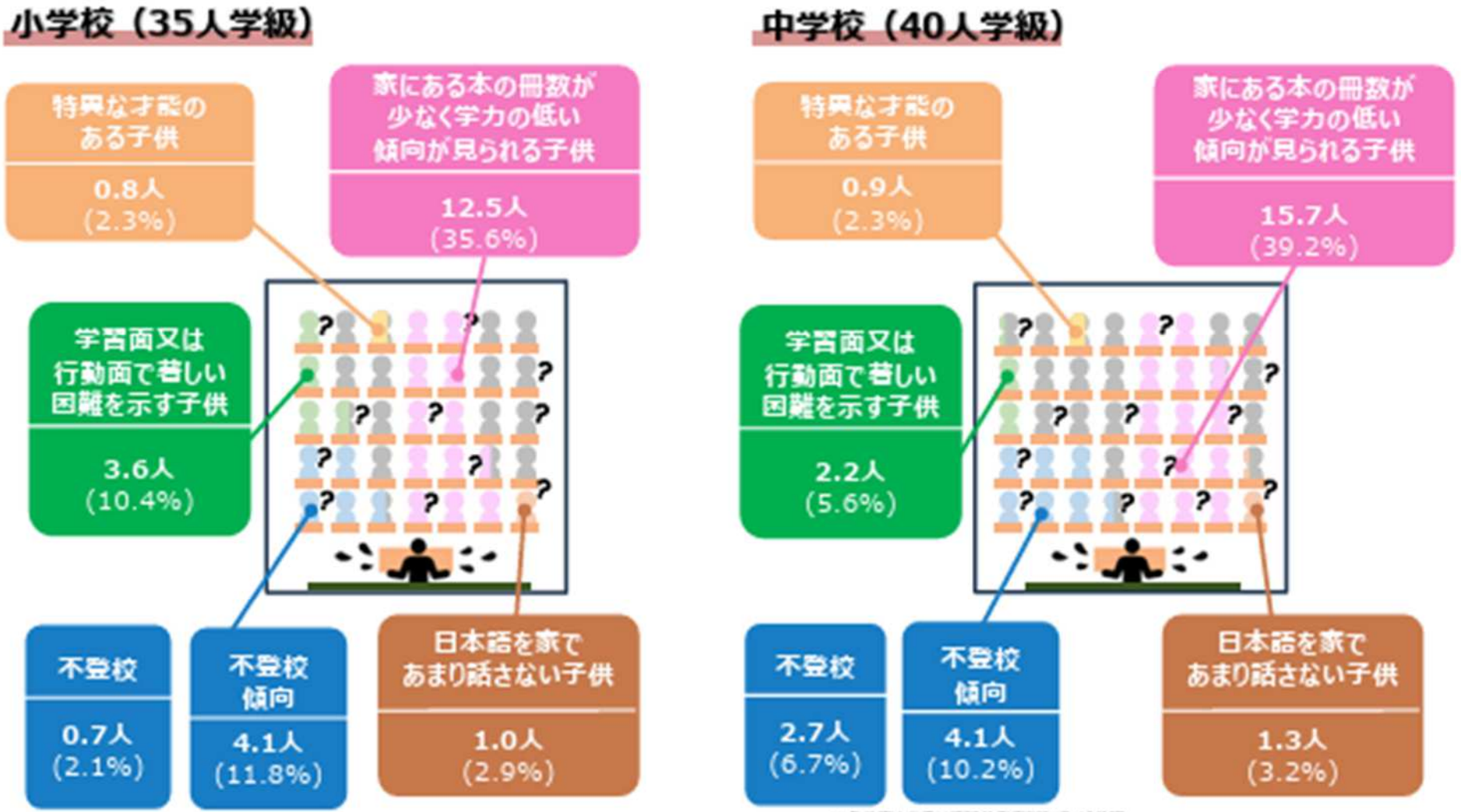
→ **異なる目標に向けて、学習を深め、広げる**

2　「個別最適な学び」が求められる背景

令和７年９月25日中央教育審議会教育課程企画特別部会　**教育課程企画特別部会「論点整理」**より抜粋

児童生徒の多様性を包摂する必要性（小・中）

- どの学校でも、多様な個性や特性を有する子供が在籍している実態が顕在化。多様性を包摂し、一人一人の意欲を高め、可能性を開花させる教育の実現が喫緊の課題



※各数字の出典は脚註参考資料P45,46参照
https://www.mext.go.jp/content/20242127-mxt_kyoiku01-000039494_03.pdf

2　「個別最適な学び」が求められる背景

① 教室の中にある「多様性」が、以前よりも顕在化された

⇒「学力差・理解の速さの差」「興味関心や得意・不得意の差」「家庭環境・経験値の差」「日本語指導が必要な子供、特別な配慮を要する子供の増加」これらを「同じ内容を、同じ方法で、同じ時間に学ぶ」だけでカバーすることの困難さ。

② 求められる学力観が変わった（知識量 → 資質・能力）

⇒現在重視されている「自分で考え、判断し、表現する力」「状況に応じて学び方を調整する力」は、一斉説明を聞くだけでは育ちにくく、子供自身が考え、選び、振り返る学びが必要。

③ コロナ禍で「同時・同一・一斉」が崩れた

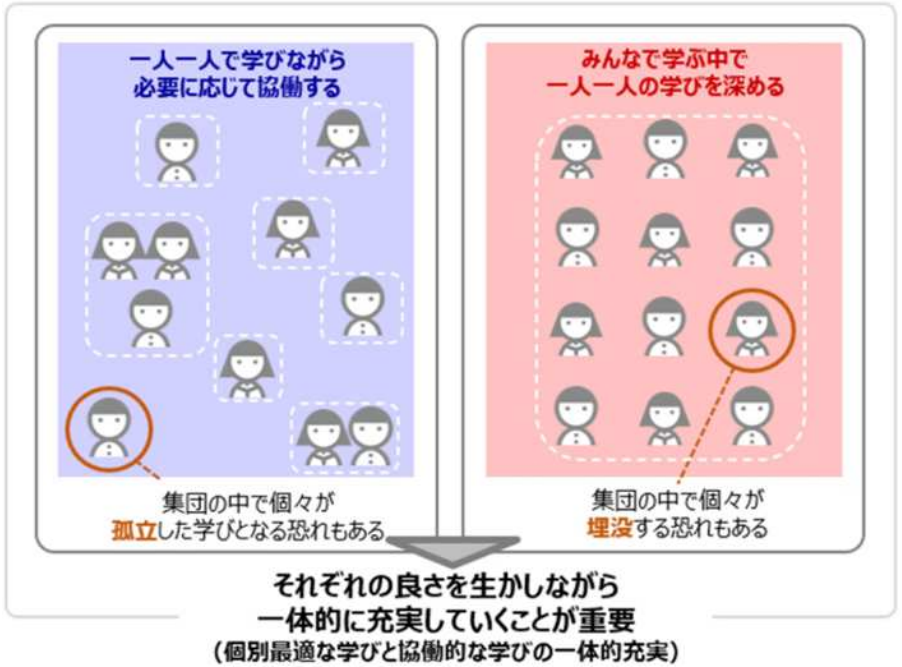
⇒コロナ禍で生まれた、「登校できる・できない」「学習進度が揃わない」「家庭学習の質の差」といった状況から、「全員が同じペースで学ぶことを前提としない学び」「子供自身が学びを調整する力」の必要性が、現場感覚として共有。

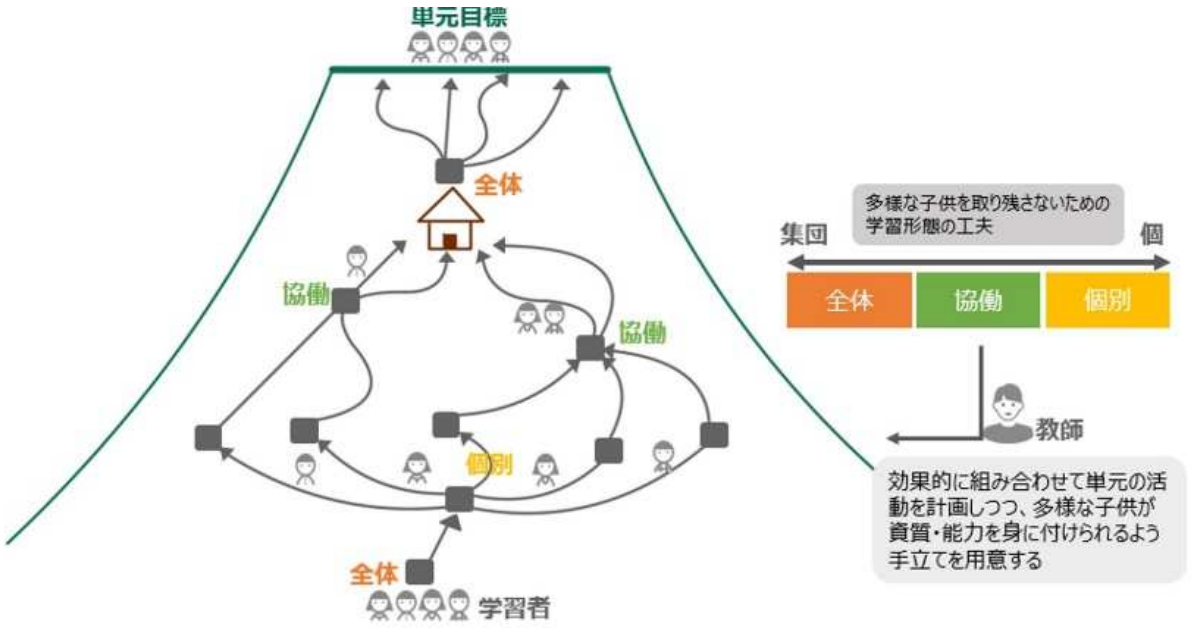
④ デジタル学習基盤が整い、「理想論」ではなくなった

⇒GIGAスクール構想により、進度を揃えるための一斉管理から学びを支えるための個別支援へと、授業の設計思想を転換できる条件が整備。

3　「協働的な学び」との一体的な充実

文部科学省「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のためのサポートマガジン『みるみる』より抜粋





「単元のゴール」（目指す資質・能力）は共通。
「登り方」（個に適した学び方）は人それぞれ。

個別に考える時間と、友達と考えを交流する時間を
行き来しながら、学びが深まっていく往還構造をつくる。

「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥ることがないように、
「協働的な学び」と一体的に充実させる。

4　具体的な事例から～戸田東小の実践より～

文部科学省「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のためのサポートマガジン『みるみる』より抜粋

「個別最適な学び」の視点

① 子供が自分の理解や課題を意識できる学習設計

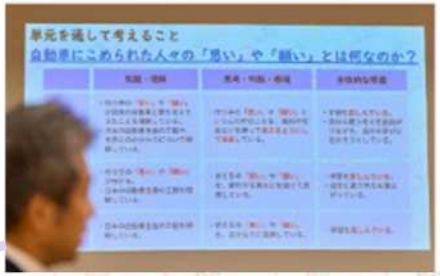
　課題に取り組む中で、自分はどこまで理解できているか、どこに課題があるかを振り返る場面が設定されており、子供一人一人が自分の学びの状態を意識しながら学習を進めている。

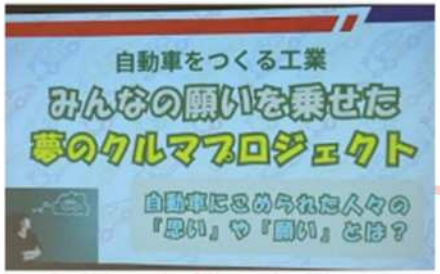
② 学び方を子供が調整できる余地の確保

　資料の使い方や考える順序などを一律に固定せず、子供が自分に合った進め方を選べるようにしており、それぞれが理解の状況に応じて学びを調整できるよう工夫されている。

③ ICTを個別最適な学びを支える道具として活用

　端末は情報収集や考えの整理、振り返りのために活用され、使用自体が目的化していない。子供が自分の理解を深めたり確かめたりするための支援としてICTが位置付けられている。





みんなの願いを乗せた 夢のクルマプロジェクト の学習計画

		学習活動	
きっかけ	1時間目	単元の学習計画を知ろう。 作り手の「思い」や「願い」を、作り手になりきって考えてみよう。	社会
計画	2時間目	作り手の「思い」や「願い」から、学習課題を立てよう。	
探究	3～5時間目	設定した課題の解決に向けて、探究活動を進めよう。	
発表	6時間目	探究してきた作り手の「思い」や「願い」を伝えよう。	
まとめ	7時間目	作り手の「思い」や「願い」をまとめよう。	
制作	8～11時間目	第18回トヨタ夢のクルマアートコンテストに参加	図工









「協働的な学び」の視点

① 個々の考えを持ち寄る必然性のある課題設定

　一人では答えが一つに定まらない課題が設定されており、友達の考えを聞くことで新たな気付きが生まれる構造となっている。協働が学びを深めるために不可欠なものになっている。

② 協働を通して個別の学びが更新される学習過程

　話合いの後に自分の考えに立ち返る時間が確保されており、友達の意見を踏まえて考えを修正・深化させるなど、協働が個々の理解を高めるプロセスとして機能している。

③ 教師が個々の考えをつなぎ、学びを束ねる役割

　教師が子供の考えを価値付けたり関係付けたりしながら全体で共有することで、協働的な学びが成立している。子供は集団の中で自分の学びに向き合うことができている。

5　現状の成果と課題、今後について

（１）成果

　各小・中学校の授業において、児童生徒一人一人の理解や状況に応じた支援が行われるようになり、学びの充実が図られてきた。教師が多様な支援策を講じ、個の学びを支える工夫を重ねてきたことで、学習の遅れへの対応や学び直しなどが日常的に行われるようになってきている。

（２）課題

　まず、個別最適な学びについての定義やイメージが正しく定まっていない可能性があり、一人一人の教師が研修等を通して捉えなおしていく必要がある。また、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させる点には課題が残っている。一人一人の学びを的確に見取る場面、互いの考えの違いを生かして練り上げる場面、自己の考えの変容を振り返る場面などが薄まっている状況がある。協働を通して個の見方・考え方を更新していく学習過程の充実が、今後の重要な課題である。

（３）今後について

・一人一人の教師の捉えを明らかにするとともに、研修・指導の中で一人一人の教師が自分の言葉で語れるようにしていく。
・特定の学習の型を示すのではなく、教室の中で子供一人一人が自分の理解や課題に応じて学びを調整できているかという視点を大切にし、授業改善を進めていく。
・個の学びの状況を的確に見取り、それを基に協働的な学びへとつなぎ、見方・考え方を深める学習過程の充実を図る。
・戸田型PBLやICTの活用は、その実現を支える有効な手段として位置付けていく。